

氏名(本籍)	にし ^{にし} ざわ ^{ざわ} はる ^{はる} み ^み 西澤晴美(宮城県)
学位の種類	博士(芸術学)
学位記番号	博甲第5446号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	1950年代を中心とする美術と舞台芸術についての研究

主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	五十殿 利治
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守屋 正彦
副査	筑波大学准教授	Dr.Phil	長田 年弘
副査	吉備国際大学教授		井上 理恵

論文の内容の要旨

(目的)

本論文は、戦後の美術界において「夜の会」や「世紀の会」のようにジャンルの交流や芸術の「総合」を掲げる動向や、「実験工房」、「具体美術協会」、「制作者懇談会」など、舞台芸術と関わりの深い団体が多く出現することに着目し、こうしたジャンル横断的活動を戦後美術の特質と捉え、とりわけ舞台芸術と美術の交流と実践という視点から、1950年代を中心とする美術を論じることを目的とする。

(対象と方法)

本論文は序章、全5章、結章、図版・図表、参考文献一覧、関係資料の翻刻からなる。序章では、問題の所在を述べ、先行研究を検討し、本論の概要を示す。「第一章 美術家と舞台美術」では、まず前史として近代日本における舞台美術の成立と展開をまとめ、第2節で1950年代初頭における舞台美術の動向について検討する。1955年の「画家の舞台美術論争」など、画家が活発に舞台美術に携わっていた状況が劇団・民芸『炎の人』(1951年)の舞台美術などの共同作業を可能にしたとする。第3節では戦後のバレエ・ブームが、美術家のバレエへの参加を促したことについて考察し、とくに吉原治良と北代省三の活動は、その後の「具体」と「実験工房」の活動に示唆を与えるとする。

「第二章 芸術の革命と総合－岡本太郎の周辺」では第1節で岡本太郎と花田清輝を中心とする文学者と美術家の交流について考察する。第2節で岡本太郎と舞台について検討し、アヴァンギャルドと大衆とを結び付けようとする活動の一環として、1950年代から60年代にかけて、ショーやモダンダンスなど多様な舞台美術に携わり、多面的な才能を発揮する展開を論じる。

「第三章 「実験工房」－総合芸術への志向」ではまず1951年に結成された「実験工房」の舞台作品について、従来検討の進んでいなかった共同制作者との関わりを重点的に検討し、舞台美術についても新たな資料の収集によって議論を展開する。第2節では、「バレエ実験劇場」(1955年)を取り上げる。バレリーナ松尾明美とバレエの演出家川路明という共同企画者と制作された企画で、実験工房の舞台美術は画期的な造形であったが、主に振付の面から、主体となるバレエとの調和が取れずに終わった。だが、美術と舞踊の交流という観点から、重要性を指摘することができる。第3節では『月に憑かれたピエロ』について検

討する。同作品は演出家武智鉄二による実験劇の活動において、初めて前衛的な装置や現代音楽を用いた。福島秀子の衣装と北代省三の舞台装置・仮面は、いずれも作品の前衛性を高めることに貢献したとする。

「第四章 「具体」-舞台とアクション」ではまず初期「具体」の行った「舞台を使用する具体美術」（1957年、58年）の詳細を明らかにした上で、「アクション」との関わりから、その意義を再考する。「舞台を使用する具体美術」については、吉原の舞台美術の経験から「演劇に従属する美術」を打破する意図があり、その舞台作品はいずれも特異なものであると論じる。第2節では「具体」のアクションは「絵画の制作過程から生じる行為」という性質があったと指摘する。「舞台を使用する具体美術」はこのアクションを深化させ、その性質を変容させるにとどまらず、舞台以外の場では見られなかった新たな作品を生み出したとする。

「第五章 「制作者懇談会」と60年代への展開」では、第1節でこれまで全体像が検討されてこなかった「制作者懇談会」の活動を取り上げる。とくに同会から派生した集団劇場に河原温、池田龍雄、石井茂雄らが舞台美術の面で参加したことや、影絵の制作が行われていた点を明らかにする。第2節では、河原、池田二人と演劇との関わりに着目し「集団劇場」を端緒とし、舞台美術家金森馨を中心とする「舞台実験室」を経て劇団・人間座に至る舞台美術の展開を検討する。第3節では1959年に創設された草月アートセンターは、「実験工房」、「制作者懇談会」に参加した美術家・音楽家を集結させ、1950年代と連続する舞台作品を生み出したほか、前衛たちの「交流の広場」となったが、1960年代半ばでその活動は途絶える。結論においては、以上の議論をまとめ、今後の研究の展望を述べて挿筆する。

（結果）

著者は結論において1950年代の美術と舞台芸術の関係についてみると、大きく2つの流れがあるとする。第一は舞台芸術への関心や演出家などとの交流に基づく、舞台美術への参加の動向である。第二は新しい芸術の創造を目指す前衛の取り組むべき課題として、ジャンル交流や芸術の「総合化」を押し進める動きである。さらに、武智鉄二や川路明、または「舞台実験室」の金森馨のように、演劇・舞踊の各領域に、美術との間を結ぶ人物が登場し、ジャンルの交流、実践的活動を促進したこともこの時代の特徴であるとする。こうした美術と他ジャンルとの絶え間ない交流、そしてジャンル横断の実践的活動によって、戦後日本の美術動向は牽引されてきたと結論づける。

（考察）

本論文においては、戦後の現代美術に特徴的なジャンルの横断という現象を、舞台芸術との関わりに着目するなかで1950年代に遡って考察している。従来の視点においては、尖端的な表現を追求した「具体」や「実験工房」が個別に考察されるばかりであったが、著者はそうした研究史的な枠組みを超える試みを行い、より広範な視野においてジャンル横断の実態を明らかにしようとしたといえる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

著者は、1950年代における美術と舞台芸術の関わりについて、「具体」「実験工房」に加えて「生活者懇談会」「舞台実験室」など新たな側面にも注目しつつ、その展開を位置づけようとした。本論文は現存作家等の関係者に会見し、基本的資料を渉猟した、先駆的で、オリジナリティーのある論考として高く評価できるものである。戦後美術史の研究については、「具体」や「実験工房」等の顕著な動向を除いては、いまだ緒に就いたばかりであり、本論文においても考察として深められていない点があることは否めない。今後さらに調査研究を進め、現在のパフォーマンス・アートの源流としての位置づけを試みながら、「美術」や「アート」そのものの定義あるいは再定義に関わる問題として検証することを求めたい。

論文審査および最終試験の結果、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。